

ハツ場ダム建設に伴う調査で発掘されたものを展示する「やんば天明泥流ミュージアム」、その数ある展示物の中で特に気を引かれたものが二つあります。どちらも241年前の天明泥流に埋まっていた。まず搾油機、油をしぼる道具です。50cm×60cmの木製の枠で2枚の板の間に材料を入れてクサビを木槌でたたいてしぼる単純なもの。親子体験教室で使うため複製品を3台を製作しました。単純な作りですが先人の知恵が詰まっています。材を挟む二枚の板の内側には、効率よく油がまとまるように溝が彫ってあります。材料はエゴマ。ハツ場の谷では、ゴマやアブラナは栽培に不向きなので、エゴマを使っていたのではないのでしょうか。搾った油は、澄んだ緑がかった黄金色をしていました。当時油は、食用ではなく神棚や行灯など灯明用でした。油は高価なものなので自家製の油を作っていたのかもしれませんが、次に、竹の笛です。やはり泥流に埋まっていた。朽ちかけて割れています。当然吹いてみることは出来ません。笛が大好きな私としてはどんな音がするのか興味が湧き、なんとしても音が聞いてみたい。そこで、実際に作ってみることにしました。手持ちの篠竹の中から同じ太さのものをを見つけ出し、調査図を元に歌口・指孔の大きさと位置を割り出し設計図を作る。それをもとに竹を加工。歌口を作り、指孔を開け形をつくっていく。仕上げは漆の代わりに黒と朱のカシュー塗料を塗る。塗料が乾くのを待って吹いてみる。緊張の一瞬です。高くそして澄んだ明るい音色がします。どんな曲を吹いていたか分かりませんが、目を閉じて吹いてみると、収穫を祝う祭囃子が聞こえてくるようでした。こんな古文書にも書かれないことに興味を持って調べることも考古学なのかもしれません。



浅間高原に埋もれた歴史や物語の多さに、在職中にずいぶん出会った。なぜ妻恋ではなく嬭が使われたのにはどんな意味があるのか。長野原は長野一族と関係あるのか。戦時下、浅間山麓はなぜ軍の演習地になったのか等々知らないことばかりだった。最大の疑問は、戦国時代末期に富岡方面から移住してきた黒岩一族の活躍にまつわる話だ。小集落だった大笹村を移転し西吾妻の中心となる大笹宿を作り上げたその財力はどこにあったのだろうか。そして、黒岩姓が嬭恋村の人口の3割近くを占める増加は普通ではなく不思議であった。ところで、現代に通じる浅間高原の歴史は、浅間山の天仁の大噴火(1108)後に大地が安定したおよそ200年後に信州海野一族の下屋将監らによって開拓され、その血筋の者たちによって大半の集落がつくられた。地名も海野氏に近い頼朝伝説によるものが一番多く残る。まさに信州の力と経済の及ぶ浅間高原の様相からここは上州の埒外地に近かった。「軒先を貸して母屋を取られる」はなし？話は変わるが、富岡、藤岡市の奥の甘楽郡南牧村に田口峠という分水嶺の峠がある。しかしここが上州と信州の境ではなく、しばらく手前南牧村に下った所に国境があるとう極めて異例の境界になっている。江戸初期には白田町の人々小集落をなして住んでいたから信州になったという。信州は利根川上流にも国土があるのだ。黒岩一族は当然この話を知っていたはずで、次に信州に組み込まれるとすれば、浅間高原だと誰もが想像がついたから、あえて山間の地に移住するミッションがあったのではなかったか。黒岩一族が36名で移住し活躍した浅間高原に私達はあたりまえのように群馬籍の扱いを受けて暮らしている。



特集：浅間山北麓の歴史②～中世～

アンケートに答えると毎号5名様に
ハンドブック（非売品）が当たる！



Together Forever
アンケートはこちら



ジオパークから
のお知らせ

夏のイベント情報！

未定	浅間牧場周回遊歩道ジオツアー
8/25（予定）	浅間ジオパーク火山防災の日イベント

発行：浅間山ジオパーク推進協議会

Mt. Asama Geopark Promotion Council

制作担当：広報・観光委員会

〒377-1524 群馬県吾妻郡嬭恋村大字鎌原494-45

TEL/FAX：0279-82-5566

URL：www.mtasama.com

E-mail：info@mtasama2568.xsrv.jp

Facebook：www.facebook.com/asamageopark

Twitter：https://twitter.com/home

ガイドの受付しています

「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ガイドによる案内の受付をしております。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。

【料金】＊ガイド1名あたりの値段

平 地：半日6,000円 1日12,000円（参加者11名以上はガイド2名）

軽登山：半日10,000円 1日15,000円（参加者8名以上ガイド2名）

登 山：1日25,000円（参加者8名以上ガイド2名）

編集後記

今号は歴史特集の第2弾 戦国～江戸を掘り下げました。ご自身が住んでいる地の歴史は案外知らないもの。少しでも興味をお持ちになったらぜひご自身でも調べてみてください。

国立公文書館デジタルアーカイブHP

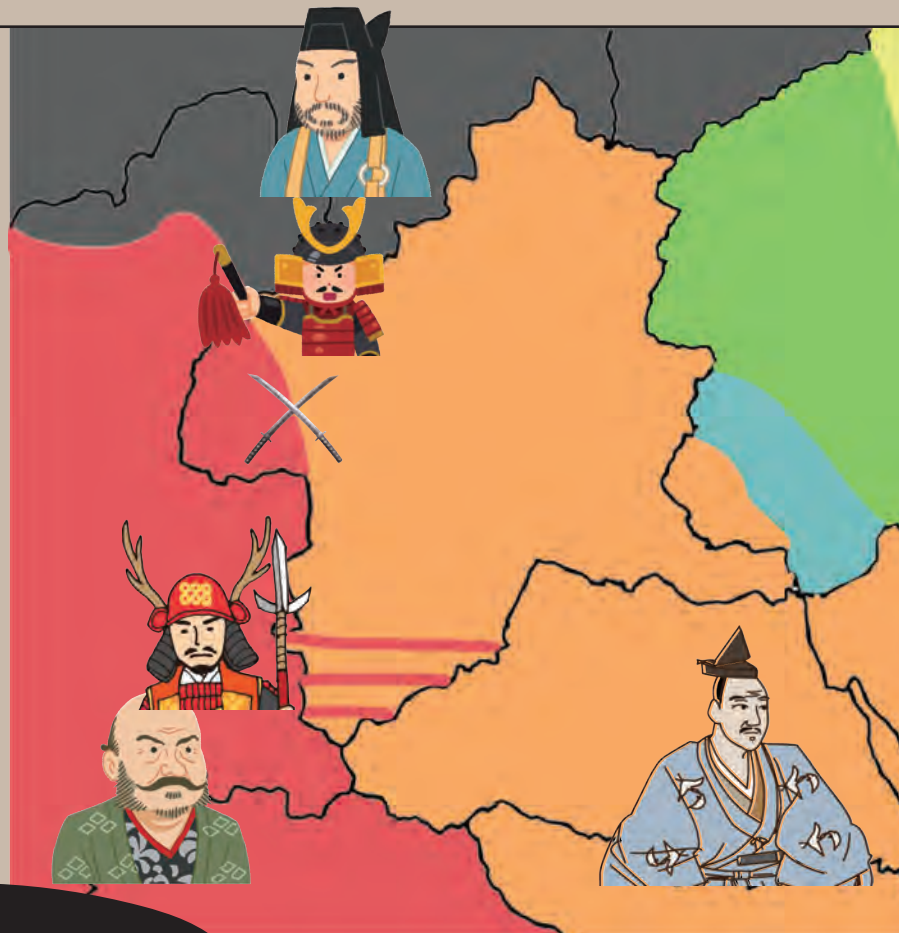
浅間山北麓の歴史を巡る旅の第2弾。今回は、武士が台頭した鎌倉時代から江戸時代を紹介します。

この時代は、各地で勢力を伸ばした武将達が国盗り合戦を繰り広げ、豊臣秀吉が全国をほぼ統一し、徳川家康が豊臣家を滅ぼして平安な時代を築いた波乱万丈の時代と言えるでしょう。この大きな流れの中で、この地では、何が起きていたのか探ってみましょう。

History of Mt.Asama North Geopark②

戦国～江戸

戦国時代、武田信玄、上杉謙信、北条氏康が勢力を争っていたとき、ここ浅間山北麓の嬬恋、長野原では、武田と上杉との争いが激化してきました。つまり、武田方の真田氏と上杉方の斎藤氏の攻防が起きてきました。



その時歴史が動いた 長野原合戦



▲余湖くんのホームページ 様より

真田軍記である加沢記にその当時の戦いの様子が記された長野原合戦があります。長野原城は街並みの北側の尾根、東西約700mに細長く位置し、本丸、出丸、箱岩出丸、物見台、水の手からなり、それぞれ虎口、堀切り、腰曲輪等で構成されています。当時長野原城は真田幸隆の弟常田新六郎隆永が守っていました。永禄6年（1563）上杉方の岩櫃（岩下）城主の斎藤氏は長野原城攻略に動き、長野原合戦が始まりました。斎藤氏は重臣で、羽根尾城主、海野幸光・輝幸兄弟に500騎を、甥の斎藤弥三郎には300騎を与え、真田勢の常田氏を攻めました。最大の激戦は長野原城下の諏訪神社社前で行われ、多勢に無勢の常田氏は敗退しました。

武田方家臣の真田はこの長野原合戦の敗走から、岩櫃城攻防へと進展していきます。岩櫃城を落し、嵩山城、名胡桃城へと進み、ついには沼田城まで勢力を伸ばしていきました。長篠の戦いで織田信長に負けた武田はここから没落していきます。主人武田を失った真田昌幸は、自立の道を選び、鎌原城主鎌原氏を家老として勢力を振るっていくことになります。

善光寺へ通ずる要衝の地

大笹関所

関所は、起源を飛鳥時代（7世紀後半）に持つ、防衛を担う軍事的機能、治安維持を担う警察的機能、交通料の徴収を担う経済的機能を目的としたものです。多くの方が抱いているイメージとして、手形を提示すれば誰でも通ることのできるものというものが多いですが、基本男性の手形提示義務はほぼ皆無だったとされています。一方女性に対しては厳格に手形の提示を求められていました。特に江戸から出る女性に対しては江戸の人口維持と参勤交代を義務化する上でも厳しくされていました。ところが大笹関所には現存している抜道がありました。抜道の途中には碑が残っており、『揚雲雀見聞てこに体ふて右を仏の道と志るべし』とあります。仏の道とはいわゆる善光寺へ向かう道のことであり、関所を通らず抜道を通った人々が迷わないよう石碑と道案内の役目を果たしていました。



馬

との深いかかわり

現在の群馬県辺りが上野国（こうずけのくに）と称されていた頃（8世紀初め～）この地域には九つの牧場があり、その一つがこのジオパーク辺りにあり、官営牧場として官馬が育てられていました。その後、武士が国を治める時代となり、領地を争う戦国の時代には、馬は人の移動、荷の運搬等に多用されるようになり、その存在価値は高まっていきました。江戸時代になって、人の交流が盛んになり、街道が整備されると、六観音の一尊であった馬頭観音が死んだ馬等の供養塔として建立されるようになりました。嬬恋村には334体、長野原には375体もの馬頭観音像があり、多くの馬が行きかったことを物語っています。

長野原町の石造文化財 1990年 上毛民俗学会
嬬恋村の石造物 1993年 嬬恋村教育委員会

人と物が行き交う

宿場町の暮らし

江戸時代の庶民の暮らしというと、江戸の下町のイメージが浮かぶ一方、地方の農村の暮らしは、年貢の取り立てに苦しみ日々の暮らしで精いっぱいだった？この地域ではそのような想像を覆し、豊かな

暮らしをしていたようです。信州街道などが近くを通っていたので、宿場を営む住民に加え、人の往来が多く商売や交易がさかんでした。鎌原地区でもビードロの鏡やべっ甲かんざし、印籠などが出土し、ハッ場ダム建設に伴う発掘調査では、伊万里焼や唐津焼、瀬戸焼などがたくさん出土されていて、湯のみや茶碗の中には名前が刻印されたものもあり、それだけの経済力を持っていたことがわかります。また、笛や三味線などの楽器、将棋の駒や人形、装飾品なども見つかっており、生活は単調なものではありませんでした。

三面馬頭観音
1783年7月建立



◀▲やんば天明泥流ミュージアム 提供